高崎市文化財調査報告書　第450集

倉賀野中町遺跡

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２０

高崎市教育委員会
冬木商事　株式会社
有限会社　歴史考房まほら

くらがのなかまち
倉賀野中町遺跡

（倉賀野 45-2 遺跡）

２０２０

例　言

1．　本書は、店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．　発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、冬木商事株式会社の負担により実施された。
3．　発掘調査、及び整理・報告書作成は委託業務として有限会社歴史考房まほらが、高崎市教育委員会の指導のもと実施した。
4．　発掘調査の事項は以下のとおりである。
　遺　跡　番　号　倉賀野中町（倉賀野 45-2）遺跡（注記：781）
　遺 跡 所 在 地　群馬県高崎市倉賀野町字中町 1600-1
　発掘調査担当者　山﨑芳春・笠原仁史（㈲歴史考房まほら）
　発 掘 調 査 期 間　令和元年 11 月 11 日　～　令和元年 11 月 22 日
　調　査　面　積　451 ㎡
　整理作業担当者　笠原　仁史（㈲歴史考房まほら）
　整　理　期　間　令和元年 11 月 25 日　～　令和 2 年 3 月 31 日
5．　本書の編集は笠原仁史が行った。執筆は第 1 章第 1 節を高崎市文化財保護課が、その他を笠原が担当した。
6．　本書に使用した遺構写真は山﨑芳春が、遺物写真撮影は有限会社歴史考房まほらが行った。
7．　本書で使用した遺構平面・断面図は電子平板測量によるデジタルデータで作成したものをデジタルトレース編集したものである。なお、遺構平面測量はタナカ設計（田中隆明）に委託した。
8．　高所撮影はドローンによるデジタルカメラ撮影をクリエイトR（清水龍太）に委託した。
9．　発掘調査資料、出土遺物は、一括して高崎市教育委員会において保管してある。
10．発掘調査及び本書の作成にあたって下記の方々の御助言・御教示を賜った。記して感謝いたします。　（順不同、敬称略）
　冬木工業㈱　大和リース㈱　大和リース㈱群馬支店　山下工業㈱　原田重機
　㈲高澤考古学研究所

11．発掘調査、整理作業に従事した者は次のとおりである。（順不同、敬称略）
　発掘調査　渡明秀　佐藤誠一　静野佳春　清水万年　柳澤敏子
　整理作業　川島かおり　杉本めぐみ

凡例

1．　掲載図の縮尺は原則として次のとおりである。遺構平面図は1/200、遺構断面図は1/100である。
2．　名称は原則として、現場で付された名称を継承した。
3．　掲載遺物の縮尺は須恵器・陶磁器・石器は 1/3、石製品は 1/5 で図中に縮尺を示した。
4．　遺構平面図の北方向は座標北を示し、座標は世界測地系Ⅸ系である。
5．　出土遺物観察表に示す色調は農林水産技術会議事務局（財）日本色彩研究所監修『標準土色帖』を参照した。また、石器実測・石材鑑定は山﨑芳春が行った。
6．　出土遺物観察表の計測値に示した（　）は復元推定値を、〈　〉は残存値を表す。

目　　次

序　例言　凡例

第１章　調査に至る経緯と調査の経過・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

第３章　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

第４章　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　第１節　堀（SD-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　第２節　撹乱出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

写真図版

報告書抄録

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

令和元年６月土地所有者冬木商事株式会社および工事主体者株式会社クスリのアオキから、高崎市倉賀野町において計画している物販店舗の建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である倉賀野城内にあるため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年６月 27 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年７月 24 日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、倉賀野城三の丸を廻る堀を検出、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「倉賀野中町遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、令和元年 10 月 18 日に土地所有者冬木商事株式会社と民間調査機関有限会社歴史工房まほらとの間で契約を締結、また同日に土地所有者冬木商事株式会社・民間調査機関有限会社歴史考房まほら・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

第１図　遺跡位置図（『まっぷ de たかさき』を使用）　縮尺 1:5000

第２節　調査の経過

●発掘調査

発掘調査は令和元年 11 月 11 日から同年 11 月 22 日まで実施された。調査経過の概略は下記のとおりである。

11 月 8 日：　水道工事、仮設電気工事。
11 月 11 日：　調査開始。器材搬入。重機による表土掘削開始。ノッチタンク・水中ポンプ設置。
11 月 12 日：　重機による堀覆土掘削開始。基準点測量。
11 月 13 日：　作業員投入、堀調査開始。
11 月 14 日：　重機による表土掘削、堀覆土掘削終了。
11 月 15 日：　堀精査。
11 月 19 日：　遺跡全景写真・ドローン撮影。高崎市教委検査。
11 月 20 日：　遺構測量終了、調査終了。
11 月 21 日：　重機による堀深堀。埋め戻し開始。
11 月 22 日：　埋め戻し終了。
11 月 25 日：　トイレ撤去。水道使用停止。

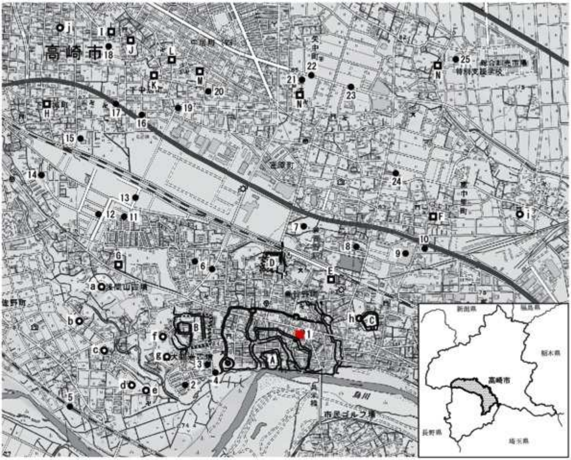
第２章　遺跡の立地と環境

群馬県高崎市は、関東平野の北西端に位置しており、西に浅間山、妙義山、北に広大な扇状地を持つ榛名山、赤城山、そして南西から南方にかけては御荷鉾山系、秩父山系等の山々に囲まれ、南東に広大な関東平野を望むことができる環境にある。

倉賀野中町遺跡は倉賀野城三の丸の外郭堀の一画にあたり、JR 高崎線「倉賀野駅」より南へ約 500m、烏川左岸の台地上に立地し、標高は約 81 m である。

周辺には倉賀野城の支城とされる倉賀野西城（西約 300m）、倉賀野東城（東約 280m）、永泉寺砦（北約 300m）、養報寺(北東約 270m)が隣接し、さらに西側には前方後円墳の浅間山古墳 (a)、大鶴巻古墳 (g)、小鶴巻古墳 (f) をはじめとする倉賀野古墳群、室町期の倉賀野新堀屋敷が、東には前方後円墳の長賀寺山古墳 (h) が点在している。また、北には古墳・平安時代の集落・水田跡が確認されている倉賀野条里遺跡Ⅰ・Ⅲ (6)、倉賀野上樋越遺跡 (7)、倉賀野辻薬師遺跡 (8)、倉賀野中里前遺跡 (9)、倉賀野中里前２遺跡 (10)、他に東中里城（16 世紀）が分布している。さらに広範囲に様々な遺跡が分布しているが、これについては第２図、第１表を参照されたい。

参考文献
「新編高崎市史資料編３中世Ⅰ」1996　高崎市市史編さん委員会
「群馬県古城塁址の研究　上巻」1971　山崎一
「倉賀野万福寺Ⅱ遺跡」1994　高崎市教委
「倉賀野上樋越遺跡」2014　高崎市教委
「下之城仲沖遺跡４」2014　高崎市教委



第２図　周辺遺跡分布図（『国土地理院　電子地形図1:25,000』を使用）

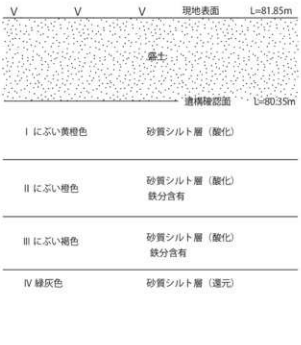
第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	倉賀野中町遺跡	中世の城（倉賀野城三の丸の外郭堀の一部）	A	倉賀野城	室町戦国／倉賀野城主・金井淡路守
2	倉賀野万福寺遺跡Ⅱ	縄文住居、古墳住居・古墳・周溝墓、ほか	B	倉賀野西城	室町戦国／倉賀野城の支城
3	倉賀野万福寺遺跡	縄文住居、古墳住居・古墳・周溝墓、ほか	C	倉賀野東城	戦国／倉賀野城の支城
4	倉賀野宮之前遺跡	古墳住居・古墳・周溝墓、ほか	D	永泉寺砦	戦国／倉賀野城主・金井淡路守が開基、自らの菩提寺　倉賀野城の北を守る支城
5	下佐野遺跡（Ⅱ地区）	縄文・古墳・平安住居、中世井戸、近世屋敷			
6	倉賀野条里遺跡Ⅰ・Ⅲ	平安住居・水田、中世溝	E	養報寺	戦国／倉賀野城の支城
7	倉賀野上樋越遺跡	奈良平安住居・溝、中世溝・井戸、ほか	F	東中里城	戦国／城
8	倉賀野辻薬師遺跡	奈良集落、平安畑	G	倉賀野新堀屋敷	戦国／館？
9	倉賀野中里前遺跡	古墳・奈良平安住居	H	和田下之城	戦国／和田城の支城
10	倉賀野中里前２遺跡	奈良平安溝・水田・池状遺構	I	下中居新井屋敷	中世環濠屋敷
11	下之城村前Ⅲ遺跡	平安水田、中近世溝・土坑	J	高尾屋敷	中世環濠屋敷
12	下之城村前Ⅳ遺跡	古墳住居、平安水田、中世堀・掘立	K	下中居福田屋敷	中世環濠屋敷
13	下之城村前遺跡７	平安水田、古代大溝中近世溝・掘立	L	下中居佐藤屋敷	中世環濠屋敷
14	下之城仲沖遺跡３	平安水田、古代大溝、中近世溝	M	道場屋敷	中世環濠屋敷
15	下之城村前Ⅱ遺跡	平安水田、中近世溝・土坑	N	栗原・矢中屋敷	中世環濠屋敷
16	下之城村東遺跡３	平安水田、中近世溝	O	大下屋敷	中世環濠屋敷
17	下之城条里遺構	平安水田、中世掘立	a	浅間山古墳	前方後円墳（前期末）
18	上中居天神裏遺跡1･2	平安水田、中近世溝・井戸	b	庚申塚古墳	円墳（前期）
19	上中居条里遺跡	古墳住居・水田、平安住居・溝・水田、中世溝	c	蔵王塚古墳	前方後円墳
20	上中居条里Ⅲ遺跡	縄文住居、古墳住居、平安住居・溝・水田、中世溝	d	大山古墳	円墳（前期）
			e	茶臼山古墳	円墳または帆立貝
21	矢中宝昌寺裏遺跡	平安住居・水田、中近世堀・井戸	f	小鶴巻古墳	前方後円墳（中期）
22	矢中村北Ｄ遺跡	奈良平安住居・水田、中世溝。井戸	g	大鶴牧古墳	前方後円墳（中期初）
23	矢中下村北Ⅱ遺跡	奈良平安水田、中近世溝	h	長賀寺山古墳	前方後円墳（後期）
24	矢中村東Ｃ遺跡	古墳周溝墓、平安水田、中世館跡	i	飯玉山古墳	前方後円墳（後期）
25	柴崎熊野前遺跡	平安住居・溝、中近世溝	j	越後塚古墳	前方後円墳（中期）

第３章　基本層序 （第３図、図版３）

現地表面より深さ 1.5m 程は現代の埋め土と思われ、堀の上端を検出できたのはⅠ層上面である。

Ⅰ～Ⅳ層は砂質シルトの同一層で、季節による水位の変化によって酸化層～還元層の差、鉄分の沈着等の違いが生じたものと推測され、おそらく高崎泥流層に比定されるものと考えられる。



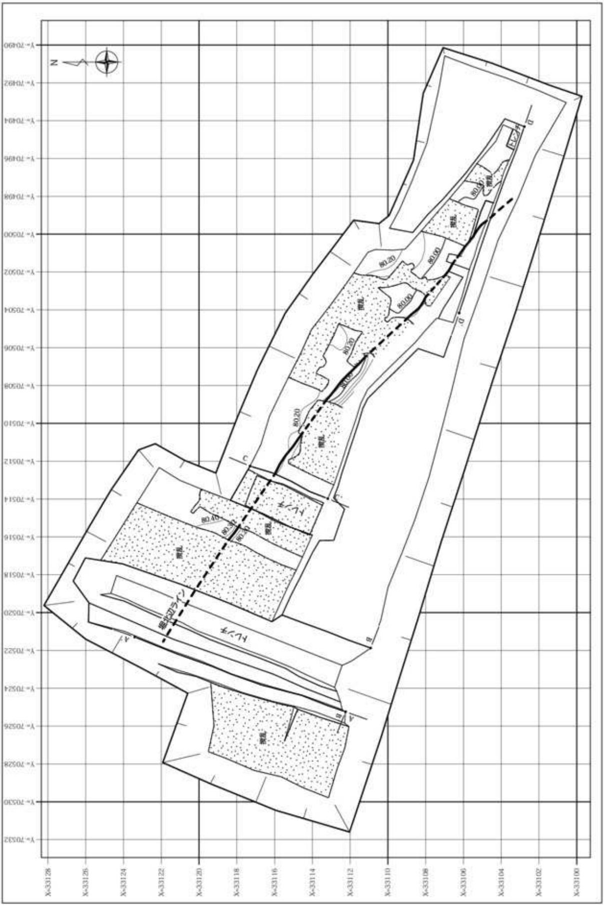
第３図　基本堆積土層（柱状図・写真）

第４章　遺構と遺物

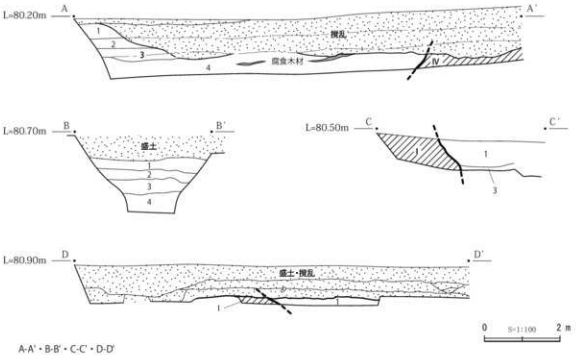
第１節　堀（SD-1）（第４～６図、第３表、図版１～３）

今回の調査で確認した遺構は堀（SD-1）のみである。倉賀野城は山崎一氏が現地調査を踏まえて1969年に作成した縄張り図によると輪郭式の平城であるが、今回の調査範囲は三の丸外郭堀の一画で、堀の北辺を対象とした。なお、重機により深掘りトレンチを掘削し、堀の底面（深さ）を確認しようと試みたが、約 3.2m まで下げたものの底面は確認できず、1m のピンポールを刺し込んでも底に当たった感触はなかった。作業上これ以上掘り下げることは危険と判断し、底面（深さ）を確認することは断念した。また、北辺傾斜面を確認しようとしたが、 全体的に攪乱による破壊が著しく深掘りトレンチを設定した範囲においても下方まで攪乱が及んでおり、明瞭な断面形状を確認することはできなかった。よって、北辺は推定ラインに沿った状況で確認することができたのみで、堀幅を含む堀の規模は確認できていない。確認規模は東西 30 ×南北 10 m程、深さ 3.2 m程である。北壁傾斜角は上部で 40 ～ 48°、下部で 51 ～ 66° 程を測り薬研堀の形状が窺えるが、単純に逆台形に掘られた上部が崩れ落ちた結果、上部が開いた形状になっている可能性も考えられる。

堀の覆土は腐植土に近い黒色粘質土と部分的に砂層が認められること、山崎氏が現地調査を実施した昭和 30 年頃までは堀の痕跡が部分的に残っていたことを考えると基本的には長期に亘って埋没した自然堆積と推測されるが、江戸時代には例幣使街道、中山道の倉賀野宿の本陣があった場所であり、



第４図　遺構全体図（S=1/200）



A-A'・B-B'・C-C'・D-D'
1. 黒褐色粘質土　帯状に青灰色粘土混上。しまりあり。陶磁器・木材などの廃棄物あり。
2. 砂層　黒褐色粘質土混土　しまりあり。陶磁器・木材などの廃棄物あり。
3. 黒褐色粘質土　しまりあり。陶磁器・木材などの廃棄物あり。
4. 黒色粘質土　しまりあり。陶磁器・木材などの廃棄物あり。
堀底面は、さらに 1.0m 以上下方。未確認。

第５図　土層断面図

堀の覆土中から近世末～近代と考えられる陶磁器などが出土していることからゴミ捨て場として人為的に埋められた部分もあったと思われる。

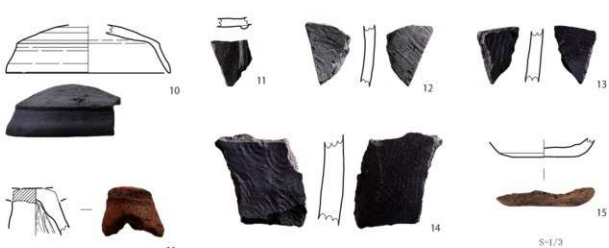
なお、今回の調査において堀の規模を確認することはできなかったが、堀の覆土、調査中の湧水量から水堀と考えられ、幅・深さともに十分な防御機能を備えた大規模な堀であったことは容易に想像できる。

第２節　撹乱出土遺物　（第６～10 図、第２表）

本調査における出土遺物の大半は撹乱からで、古墳時代の須恵器・土師器小破片が数十点含まれるものの、ほとんどは近世末～現代と考えられる陶磁器・瓦・レンガなどで、廃棄された状態で大量に埋められていた。おそらく昭和中期以降にまとめて廃棄されたものと思われるが、遺物として回収したのはごく一部である。

なお、堀覆土中からの出土遺物も含め、本城の時期に該当すると思われる遺物は見つかっていない。

堀（SD-1）

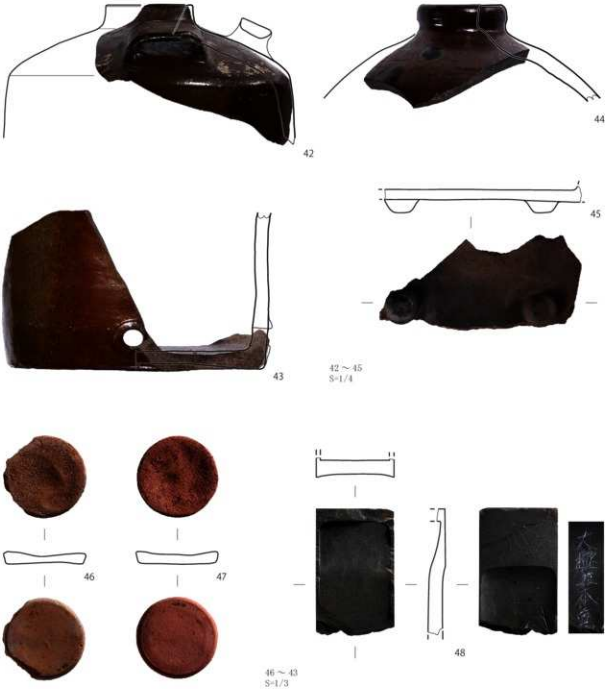


撹乱

第６図　堀・撹乱出土遺物

第７図　撹乱出土遺物

第 8 図　撹乱出土遺物



第 9 図　撹乱出土遺物

現代瓦：S ≒ 1/5

耐火レンガ

レンガ

第 10 図　撹乱出土遺物

第 2 表　出土遺物観察表

No.	遺構	種別 器種	計測値 (cm) 口径	底径	器高	残存	胎土 色調	特徴・備考	注記
1	堀 (SD-1)	陶器 花形皿	(9.7)	5.0	3.2	2/3	胎土：微細砂 胎土色：灰黄	灰釉、貫入、底部無釉（唐津釉？）	781SD-1
2	堀 (SD-1)	陶器 鉢	—	9.2	〈4.1〉	体部下位～底部	胎土：細砂 胎土色：灰黄	灰釉、底部無釉、三足貼付け、瀬戸美濃？	781SD-1
3	堀 (SD-1)	陶器 碗	(9.6)	4.5	5.7	1/2 弱	胎土：細砂 胎土色：灰白	灰釉・鉄釉掛け分け、多重沈線、瀬戸美濃	781SD-1
4	堀 (SD-1)	陶器 碗	(8.9)	4.5	6.0	1/2 弱	胎土：細砂 胎土色：灰白	灰釉・鉄釉掛け分け、多重沈線、瀬戸美濃	781SD-1
5	堀 (SD-1)	灯器 燈鉢	—	(16.0)	〈4.0〉	体部下位～底部 1/4	胎土：石英・軽石・砂 胎土色：橙	内面：摺目 (7 本)	781SD-1
6	堀 (SD-1)	陶器 碗	—	5.2	〈2.4〉	底部	胎土：細砂 胎土色：灰白	灰釉、瀬戸美濃？	781SD-1
7	堀 (SD-1)	磁器 染付碗	—	7.8	〈1.1〉	底部	胎土色：灰白	鳳凰、肥前？	781SD-1
8	堀 (SD-1)	磁器 染付碗	8.6	—	〈4.8〉	口縁～体部	胎土色：灰白	外：牡丹・竹笹 内：四方襷文　　肥前？	781SD-1
9	堀 (SD-1)	磁器 染付碗	—	4.7	〈5.8〉	底部	胎土色：灰白	絵付け、大明年製、肥前	781SD-1

No.	遺構	種別 器種	計測値 (cm) 口径	底径	器高	残存	胎土 焼成	色調	内・外面の特徴	注記
10	撹乱	須恵器 蓋	(13.0)	—	〈3.8〉	口縁～天井部 1/5	胎土：長石・砂 焼成：良好 (還元)	灰	ロクロ調整、天井部回転ヘラ削り。	781 ｶﾀﾗｼﾞ
11	撹乱	須恵器 壺	—	—	—	底部破片	胎土：石英・砂 焼成：良好 (還元)	灰白	高台貼付	781 ｶﾀﾗｼﾞ
12	撹乱	須恵器 甕	—	—	〈4.8〉	体部破片	胎土：石英・砂 焼成：普通 (還元)	灰白	外：平行叩き 内：青海波文	781 ｶﾀﾗｼﾞ
13	撹乱	須恵器 甕	—	—	〈4.3〉	体部破片	胎土：長石・砂 焼成：普通 (還元)	褐灰	外：平行叩き 内：青海波文	781 ｶﾀﾗｼﾞ
14	撹乱	須恵器 甕	—	—	〈7.3〉	体部破片	胎土：長石・砂 焼成：良好 (還元)	外：灰白 内：褐灰	外：平行叩き 内：青海波文	781 ｶﾀﾗｼﾞ
15	撹乱	土師器 小型甕	—	6.4	〈1.3〉	底部 1/3	胎土：雲母・砂 焼成：良好	にぶい黄橙	ヘラナデ	781 ｶﾀﾗｼﾞ
16	撹乱	土師器 高坏	—	—	〈3.3〉	脚部破片	胎土：雲母・砂 焼成：普通	明赤褐	外：マメツ 内：絞り	781 ｶﾀﾗｼﾞ

	遺構	種別 器種	計測値 (cm) 口径	底径	器高	残存	色調	特徴・備考	注記
17	撹乱	磁器 染付碗	(8.8)	3.5	5.5	2/3	胎土色：灰白	外：竹文、底部刺突、内：見込み五弁花文 (コンニャク印判)　　肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
18	撹乱	磁器 染付碗	(9.0)	3.5	5.8	2/3	胎土色：灰白	外：氷裂地菊花文、内：見込み五弁花文 (コンニャク印判)　　肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
19	撹乱	磁器 染付碗	(10.0)	(3.6)	5.2	口縁～底部破片	胎土色：灰白	屋図、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
20	撹乱	磁器 染付碗	7.6	2.6	3.6	口縁部一部欠損	胎土色：灰白	草花文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
21	撹乱	磁器 染付碗	—	—	〈3.1〉	口縁～体部破片	胎土色：灰白	唐草文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
22	撹乱	磁器 染付碗	—	6.2	〈3.9〉	底部	胎土色：灰白	外：山水文？ 内：見込み山水文　　肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
23	撹乱	磁器 染付碗	(12.0)	—	〈5.0〉	1/4	胎土色：灰白	唐草文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
24	撹乱	磁器 染付碗	—	3.7	〈2.9〉	1/8	胎土色：灰白	草花文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
25	撹乱	磁器 染付碗	—	—	〈3.8〉	口縁～体部破片	胎土色：灰白	区画文 (斜格子・蒲目)、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
26	撹乱	磁器 薩摩猪口	—	(6.0)	〈4.0〉	体～底部破片	胎土色：灰白	丸文、花文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ
27	撹乱	磁器輪花 形染付皿	(9.0)	(5.6)	2.0	1/2	胎土色：灰白	山水文、肥前	781 ｶﾀﾗｼﾞ

No.	遺構	種別 器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	残存	色調	特徴・備考	注記
28	撹乱	磁器 染付皿	(13.7)	7.6	3.6	1/2	胎土色：灰白	唐草文、草花文、肥前	781 カラシ
29	撹乱	磁器輪花 形染付皿	(15.6)	(8.6)	4.6	1/5	胎土色：灰白	山水文、肥前	781 カラシ
30	撹乱	磁器 染付鉢	18.4	10.0	6.5	4/5	胎土色：灰白	外：？ 内：口縁唐草文、見込み屋図　　肥前	781 カラシ
31	撹乱	磁器 染付鉢	－	(14.0)	〈3.2〉	底部 1/4	胎土色：灰白	捻花文、肥前	781 カラシ
32	撹乱	磁器 染付碗	－	6.6	〈2.3〉	底部	胎土色：灰白	見込み変形文字、高台端部融着物	781 カラシ

No.	遺構	種別 器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	残存	胎土 色調	特徴・備考	注記
33	撹乱	陶器 菊花皿	－	5.4	〈2.3〉	1/3	胎土：細砂 胎土色：にぶい黄橙	灰釉、瀬戸美濃？	781 カラシ
34	撹乱	陶器 碗	(11.2)	4.3	7.0	口縁部 3/4 欠損	胎土：石英・砂 胎土色：灰白	外：鉄釉、体部下位～底部無釉・ヘラケズリ、 高台削り出し／内：鉄釉　　常滑？	781 カラシ
35	撹乱	陶器 碗	(11.8)	－	〈6.3〉	口縁～底部 1/6	胎土：砂 胎土色：灰白	外：鉄釉、体部下位ヘラケズリ 内：鉄釉　　瀬戸美濃？	781 カラシ
36	撹乱	陶器 上垣蓋	10.8	最大径 14.1	4.6	完形	胎土：長石・雲母・細砂 胎土色：にぶい黄橙	摘み径：3.1 ／重ね焼き痕、返り貼付け 山水上垣の蓋　　益子	781 カラシ
37	撹乱	陶器 擂鉢	－	－	〈5.4〉	口縁部破片	胎土：長石・黒砂 胎土色：浅黄	外：鉄釉 内：鉄釉、擂目 (8 本)　　瀬戸美濃？	781 カラシ
38	撹乱	陶器 鉢	－	－	〈13.3〉	口縁部破片	胎土：細砂 胎土色：灰白	透明釉、緑釉掛け流し、瀬戸美濃	781 カラシ
39	撹乱	陶器 鉢	－	－	〈4.7〉	口縁部破片	胎土：長石・細砂 胎土色：灰白	灰釉、瀬戸美濃	781 カラシ
40	撹乱	白磁 通い徳利	－	7.1	〈12.6〉	下部	胎土：長石・細砂 胎土色：灰白	透明釉、筆書き文字	781 カラシ
41	撹乱	白磁 通い徳利	－	10.5	〈10.8〉	下部	胎土：細砂 胎土色：灰白	透明釉、筆書き文字	781 カラシ
42	撹乱	陶器 醤油甕	9.3	－	〈14.7〉	肩部 1/3	胎土：長石・雲母・砂 胎土色：赤灰	鉄釉、常滑？	781 カラシ
43	撹乱	陶器 醤油甕	－	27.3	〈16.6〉	底部 2/3	胎土：長石・砂 (縞状) 胎土色：灰黄褐	鉄釉、常滑？	781 カラシ
44	撹乱	陶器 醤油甕	〈9.5〉	－	〈10.2〉	口縁～肩部 1/6	胎土：長石・砂 胎土色：明褐灰	外：鉄釉・黒釉 内：鉄釉　　常滑？	781 カラシ
45	撹乱	上師質 火鉢	－	－	〈2.8〉	底部破片	胎土：長石・雲母・砂 胎土色：灰褐	ヘラナデ、四足貼付け	781 カラシ

No.	遺構	種別 器種	計測値(cm) 上径	下径	厚	残存	胎土 焼成	色調	内・外面の特徴	注記
46	撹乱	素焼き 蓋	6.6	6.0	1.0	ほぼ完形	胎土：長石・雲母・細砂／焼成：良好	にぶい橙	外：未調整／内：ナデ 焼き塩壺 or 醤油甕の蓋？	781 カラシ
47	撹乱	素焼き 蓋	6.5	6.2	1.0	完形	胎土：雲母・細砂 焼成：良好	橙	外：未調整／内：ナデ 焼き塩壺 or 醤油甕の蓋？	781 カラシ

No.	遺構	種別	計測値(cm)	材質	備考	注記
48	撹乱	石製品 硯	長さ：〈10.0〉／幅：6.1／厚：1.1／重：135g	粘板岩	履手「大極上本高」？刻印　滋賀県高島市産？	781 カラシ

まとめ

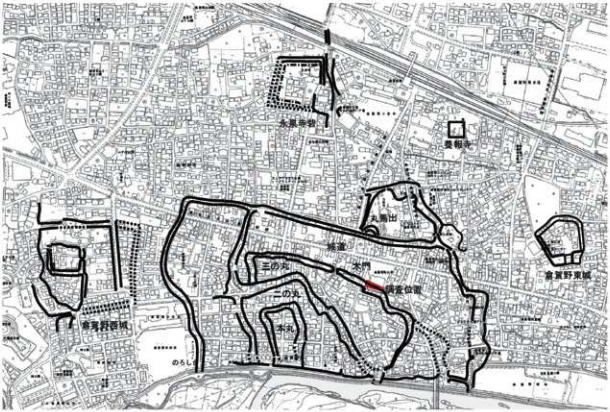
倉賀野城の歴史的経緯は鎌倉時代に秩父高俊が館を構え倉賀野氏を称し、南北朝時代にこれを改修し倉賀野城を築いたとされる。戦国時代に一時、北条氏が上野を領国化した際は倉賀野城が領国経営の中心になっていたようであるが、永禄3（1560）年に上杉謙信が越山してくると箕輪城の長野氏と上杉氏に従い倉賀野城も箕輪城の支城としての役割を担うこととなる。しかし、永禄4（1561）年には武田信玄による西上野侵攻により内部分裂も加わって永禄8（1565）年に落城し、元亀元（1570）年、武田方に付いた倉賀野十六騎の一人だった金井秀景が城主となり倉賀野秀景を名のった。天正10（1582）年、武田氏滅亡後は滝川一益に従ったが、本能寺の変後は北条氏直に仕え、天正18（1590）年、豊臣秀吉による小田原征伐では小田原城に篭城し、結果倉賀野城も降服・開城し、その後廃城となっている。（「新編高崎市史資料編3中世Ⅰ」参照）

倉賀野城は倉賀野町の中心にあり、江戸時代には中山道、日光例幣使街道の宿場町として栄え、本調査地点は本陣跡であることが知られている。すでに城全域は住宅街に変貌しており寺社域や水路等に僅かに痕跡が窺える程度であるが、山崎一氏によって現地調査が行われ、1969年に作図された縄張り図が「群馬県古城塁址の研究」1971に掲載されおり、倉賀野西城・倉賀野東城・永泉寺砦を含む倉賀野城の構造・規模が示されている。なお、いずれもどの時期に築かれ支城として機能していたかは不明瞭である。また、高崎市教育委員会による試掘調査等の成果を加えて作成された最新の縄張り推定図では山崎氏の縄張り図と照合しない部分もあり、特に本地点は丸馬出しと屈折堀という異なる構造が示されていたが、本調査において「新編高崎市史資料編3中世Ⅰ」に記載された縄張り推定図とほぼ一致する走向で堀北辺が確認された。ただし、限られた範囲、時間の中で構造・機能について十分な調査をすることは難しく、加えて情勢に応じて改修されている可能性も考えると詳細は語れないのが現状である。

この縄張り図を参考に立地を見ると、烏川左岸に接する台地上の緩やかな傾斜地にあり、南端は烏川の侵食により崖上を成している。また、東端は幅広な窪地・水路が永泉寺砦の東辺から烏川まで続いており、旧河川を思わせる地形が読み取れる。つまり、南端はもちろんのこと東端部も自然地形を利用して築かれた可能性がある。規模は倉賀野神社、万福寺を西端、九品寺を北端とし東西800m、南北400m程である。現在、城域は住宅密集地にあり明瞭な痕跡は残っていないが、推定図との照合、指摘によって堀の推定位置に一部水路、窪地が認められる程度である。

今回の調査は三の丸外郭堀の一部に限られたものではあるが、堀の規模が推定できる調査結果を得られたことは貴重であり、倉賀野城全体の構造、機能を研究する上でも重要と考えられる。堀改修の痕跡などは確認できなかったが、戦国期における西上野の情勢を考えると箕輪城の支城として重要な位置にあり、城の機能として十分な規模を持った堀であったことは間違いない。とは言え、短時間での俄か勉強ではこの時代、この地域の目まぐるしい情勢変化を把握・理解することは難しく、今後の発掘調査を含む資料増加に期待するところである。

いずれにしても、倉賀野城は上杉・北条・武田・織田が勢力争いを繰り広げる西上野において歴史的かつ研究上欠かせない重要な城であることは間違いなく、不明な点を多く残すものの新たな情報を得られたことは大きな成果であろう。



第 11 図　倉賀野城縄張り図　縮尺 ≒ 1:12500（「まっぷ de たかさき」使用）

※山崎氏作成の縄張り図、及び高崎市教育委員会作成の縄張り推定図を基に作成したもので、十分な検証はしていない。

写真図版

（遺構）

遺跡遠景　東南から

遺跡遠景　北から

図版２

遺跡全景

堀（SD-1）検出状況　東から

堀（SD-1）完掘全景　東から

堀（SD-1）完掘全景　東から

堀（SD-1）完掘全景　西から

堀（SD-1）完掘全景　西から

堀（SD-1）深掘りトレンチ Asec　北東から

堀（SD-1）深掘りトレンチ Asec 北壁立ち上り

堀（SD-1）深掘りトレンチ Bsec　北から

堀（SD-1）断割り Csec　西から

堀（SD-1）Dsec　北西から

作業風景（表土掘削）

作業風景（検出作業）

発掘調査報告書抄録

ふりがな	くらがのなかまちいせき
書名	倉賀野中町（倉賀野 45-2）遺跡
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	高崎市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第450集
編著者名	笠原仁史
編集機関	有限会社　歴史考房まほら
編集機関所在地	〒３７２－０８１５　群馬県伊勢崎市東上之宮町１２４８－３
発行日	２０２０年　４月３０日

ふりがな 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
くらがのなかまち 倉賀野中町 いせき 遺跡	たかさきしくらがのまち 高崎市倉賀野町 あざなかまち 字中町 1600 番地 1	102020	781	36° 17′ 45″	139° 02′ 54″	2019.11. 11 ～ 2018.11.22	451 ㎡	店舗建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉賀野中町遺跡	城館	中世	堀　1 条	須恵器（古墳） 陶磁器・瓦（近現代）	倉賀野城三の丸外郭堀

高崎市埋蔵文化財調査報告　第450集

倉賀野中町遺跡

令和元年 4月25日　印刷
令和元年 4月30日　発行

発行　高崎市教育委員会　文化財保護課
高崎市高松町35番地1
電話　027-321-1292
印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67番地
電話　027-251-1212